

日産科学振興財団 理科／環境教育助成 成果報告書

回次：第 3 回 助成期間：平成 18 年11月1日～平成 19 年10月31日

テーマ：自然とふれあいながら、児童が生きる力をはぐくむことができる学校づくり

氏名：杉本 泉 所属：横浜市立新吉田第二小学校

1. 課題の主旨

本校では総合的な学習の時間の目標「ふれあって はやぶちっ子 人・まち・自然」の具現化を目指している。平成11年度より校内のエコアップに取り組みながら、学校の特色づくりとして、身近な自然や学校ビオトープに関する自然体験活動を各学年に位置づけ実践を重ねてきた。17年10月より、理科・環境教育助成を受け、その成果が児童・学校の活性化として表れてきている。本年度も、さらにいっそう自然とのふれあいを大切にしながら、児童がより自然の中で楽しみ探求し、それを通して生きる力をはぐくむ事ができる様にしていきたいと考えている。

2. 準備

各学年の生活科・理科・総合的な学習の時間(以降、総合)年間指導計画に沿って、より体験的な活動が充実するよう、また児童の問題解決活動に必要なものを選び出し購入した。それらの備品購入は学校予算では賄いきれない。花壇・ビオトープ(モツゴ池・学校田んぼ)の活用計画も学年ごとに確認した。

3. 指導方法

各学年でそれぞれの指導計画に従って取り組んでいる。総合の時間を使っているので、児童の実態に合わせて話し合いをもちながら活動している。

学年・クラブ・委員会・さわやか活動・環境教育の担当者が計画に沿って指導に当たった。不明な点等は教師間で話し合ったり、インターネットで調べたりしながら指導した。

4. 実践内容

① 各学年の取り組み 各学年の環境教育指導計画に従い活動している。今年度は創立30周年にあたり特に校内の環境美化活動に取り組んだ。

- ・ 1年 花の栽培活動。個人の植木鉢や学年の花壇にアサガオを始めとする様々な花を咲かせている。
- ・ 2年 さつまいもを育てる活動。1年生を招いてさつまいもパーティー。各自、野菜を栽培した。また、プールから救出したヤゴを教室で飼育し羽化させた。トンボ博士を招いて詳しい話を聞いた。フェスティバルでも成果を発表した。
- ・ 3年 モンシロチョウの幼虫観察のためキャベツを育てた。オクラの栽培活動。

- ・ 4年 ビオトープの保全活動。各ビオトープでの観察、テニスコート周辺での生き物観察、教室での飼育活動。フェスティバルでは校内で見つけた虫を顕微鏡観察するコーナーなど設けた。



- ・ 5年 校内の水田で米作り。田起こし、田植え、草取り、鳥よけネットはり、稲刈り等の作業を地域の方の協力を得て行った。フェスティバルでは米作りについて発表した。
- ・ 6年 早ぶち川の生き物観察、川の美化活動、水質検査等に継続的に取り組み、フェスティバルでも発表した。

②クラブ・委員会活動

- ・ 早ぶち川クラブ 早ぶち川での生き物採集・観察では網や水中観察スコープを用いて、日常見られる生き物の他、珍しいトンボのヤゴも発見し、川の生態系の大切さを実感した。地域の散策では様々な生き物を見つけ、豊かな自然に囲まれている事が分かった。採集した生き物は各クラスで飼育している。



- ・ 環境委員会 ごみの分別についての劇を集会で発表し全校に分別の方法と意義をアピールした。



③校内美化活動の推進

- ・ さわやか活動では全校児童が地域の方々と一緒に校内・校外の清掃活動を行った。
- ・ 秋には校内の落ち葉を集め腐葉土作りに取り組んだ。

④校内研修としての取り組み

職員の研修として、校内の生き物観察を行った。ビオトープにすんでいるプランクトンの顕微鏡観察を通し、生

生き物の多様性・美しさを感じ取る事ができた。



5. 成果・効果

校内の自然観察・ビオトープ保全活動・さわやか活動等を通し、身近な自然に対する興味関心は高い。下学年の児童は上級生の取り組みを見て、保全活動等受け継いできている。観察・採集用具が充実してきたので多くの児童が自然との関わりを楽しみ、発見を共有しあえるようになってきた。自然観察を通し、自然のおもしろさ・豊かさ・不思議を実感し、いっそう興味を持つようになってきた。児童・教職員・地域の方々がともに進んでくることができた。

6. 所感

この度の理科・環境教育助成によって得られた成果から、児童は自然とのふれあいを通し、いっそう自然を大切にする気持ちが育っていることが確認できた。また、自然とのふれあいは川では網や水槽、水中スコープ等があると、いっそう深まることが児童の様子から感じられた。生き物の顕微鏡観察では自然の美しさや不思議に迫ることができた。また、採集した生き物を教室で飼育することで環境の一部を教室で再現し、環境に対する理解を深めることができたようだ。

これも学校予算だけでは観察・採集・飼育用品等、質的にも数量的にも時間的にも児童の活動に合ったものを購入することに対応しきれず、この理科・環境教育助成があってこそ可能になりました。日産科学振興財団には心から感謝いたします。ありがとうございました。

7. 今後の課題や発展性について

今後の課題は、ビオトープの保全をいっそう進めること。校内の生き物地図づくりをそれぞれの学年等ですすめ、情報交換しながら身近な自然を観察し、生き物に対する興味を深めていくことである。

これらの活動により、児童の生き物や地域に対する親しみがこれからも引き継がれていくことと思う。

8. 発表論文、投稿記事、メディアなどの掲載記事

特になし